

## 紅花

池松 孝子

紅花はエジプト原産、シルクロードを越えて三世紀頃、呉から渡来したという。開いた花の先を摘み取ることから「末摘花」との別名もある。『源氏物語』の「末摘花」である。紅花を『万葉集』では「紅（くれない）」と詠んでいるのが二六首、「末摘花」と詠んでいるのが一首ある。

江戸時代以前は日本各地で生産されていた。近年、奈良県桜井市の遺跡からも大量の紅花の花粉が発見されている。埼玉県桶川はかつて「紅花宿」と言われた。江戸時代、紅花をはじめ農産物の産地として宿場も栄えた。山形の「最上紅花」に次いで全国で二番目の生産量があったという。それは「最上紅花」が七月に収穫するのに対し「桶川紅花」は温暖な地域であったことから六月には収穫され「早場もの」として人氣があったからだ。当時、米は田、一反あたり二両、紅花は一反あたり四両になったといわれている。「最上紅花」の出荷先は京、大阪だったのに対し、「桶川紅花」の方は江戸だった。しかし、土が肥え、水はけのよい最上川流域で紅花の生産がさらに盛んになり次第に全国生産の四割を占めるまでになつていった。

酒田港は古くから最上川舟運によって運ばれてくる米の集積地であった。大動脈最上川の酒田港を経由して西回り航路で上方と直結していた。敦賀、小浜を経由し、京都、大阪を結ぶ拠点であった。井原西鶴の『日本永代蔵』には「西の堺、東の酒田」とある。そして「紅一匁、金一匁」といわれるほどの高値になった。その財による燈屋や日本一の大地主として知られる本間家など往時をしのばせる旧家が今も残っている。

紅花商人は山形から紅花、米、たばこ、蠟、漆等を、京からの帰り荷には、塩、衣類、お茶、紅花で染められた京友禅や雛人形を持ち帰った。山形、庄内は京の雛人形を公開する雛祭りでも有名だ。北前船の交易により上方の文化をも伝えたのだ。化粧の紅、書画用の朱墨として現在も使われている。

行く末は誰が肌触れむ紅の花

芭蕉